臼杵市（うすきし） 総括会議

ハピカム

ミライデザイン会議

大分合同新聞社が、次代を担う若手リーダーと一緒に地域の未来を考えるミライデザイン会議「ハピカム」第6弾臼杵市編が3月3日、同市の臼杵市中央公民館などで行われた。「1次産業」「観光資源」「地域産業」の3分科会の議論を経て開かれた総括会議では、各分科会で出された課題と未来をつくるキーワードに対し、他の分科会ではどのように考えるかを中心としてさらに議論を深めた。その中では、それぞれの課題として挙げられた「所得」「PR不足」「臼杵らしい気概を持つ」が、実はつながっており、PR不足を解消することや臼杵らしい気概を持つことが所得の問題も解決するのでは、と指摘された。さらに、キーワードの「守りつなぐ」「気軽さと連携」「一〇一品」もそれぞれがつながっていて、実践し実現していくことがまた、臼杵の課題解決にもつながるのでは、と議論が進められた。参加者は課題と未来像を共有、「愛する臼杵」をさらに素晴らしいまちにしていくため、今後もつながりを深めていくことを誓い合った。

■ウェブ http://www.oita-press.co.jp
■スマートフォン http://www.oita-press.co.jp/h-come/

主催／大分合同新聞社 共催／臼杵市 臼杵商工会議所 野津町商工会
協賛／国立大学法人 大分大学 ㈱大分銀行 ㈱NTTドコモ九州支社大分支店 日本たばこ産業㈱熊本支店

臼杵が好きなら好きと言おう

「1次産業」分科会まとめ

出た課題は「所得」。かなりストレートな表現となっているが、理由として1次産業の所得が低いため従事者が減っている、逆に所得が向上すれば新規就業者も増えていくだろう、ということ、キーワードは「守りつなぐ」。農業に関しては臼杵市が有機農業を進めており、有機の里づくりを目指している。荒廃した土地を元に戻し、未来につないでいくということから提案された。1次産品では甘太くんやかぼすアリ、タチウオなど売り出し中のものがあるが、分科会では有機農業の話が中心となった。「いい物を食べよう」と市が推進している。それをどう伝えていくかが大事であり、食育の話にも広がった。地元の物を食べるのは大切だという思いを未来につなげていこうと話し合った。また、守りつなぐという意味では、食材は文化であるという考えも根底にある。有名な臼杵煎餅（せんべい）はシュウガが使われているが、地元産ではない。臼杵石仏の陽りはかつて産地だったが、また福業家が用いていた保存食だとの言い伝えもあるほど古いもの。この歴史的なストーリーも含め後世に残していきたいとなった。

課題 所得 キーワード 守りつなぐ

「観光資源」分科会まとめ

課題は「PR不足」。この課題に行きつく前に臼杵市の観光の現状を考えてみた。統計によると臼杵石仏の入場がこの10年で10万人減っている。一方でボランティアガイドは増加傾向にある。臼杵には素材としていいものがたくさんある。ただ、PRの仕方がまずかったのでは、魅力が市外・県外に届いていないのではと話された。もう一点、市内の人同士で「あの人は何をしているか」という情報共有が図れていないのではないかということから、課題としてPR不足を掲げた。キーワードは「気軽さ・連携」。気軽にフクを楽しみたいという発言から発展させたのが「気軽さ」。臼杵観光を気軽に楽しみたいとの声が多いのではと指摘された。もう一つの「連携」は課題を解決するための方法。分科会の中でも互いに顔は知っているが、何をしているのかを知らないという人がいた。だが、話してみて分かりあえたという瞬間があり、他業種間や市民の中でも互いが何をしているのかを知ってみたいとの意見が出た。特に若い世代間の情報共有を図ることが観光浮揚につながる、と提案された。

課題 PR不足 キーワード 気軽さ・連携

「地域産業」分科会まとめ

臼杵には観光や食品を含めていいものがたくさんある。かほすブリや歴史的なストーリーなど、全てが売り出していける素晴らしい資源になっている。それにもかかわらず、臼杵で生活している市民が充分知っているのだろうか、勉強不足ではないか、PRが足ではないかとの意見が出された。また、知っては いても誇りを持っておらず「臼杵だから」など卑下することも多いと指摘された。もっと自分たちの強みを知って、生かしていこうとの思いを込めて、課題は「臼杵らしい気概を持つ」という言葉になった。キーワードは「一〇一品（いちまるいっぴん）」。一村一品でもいいが、一業種一品であったり、一社一品であったり、一地域一品など、〇の中にさまざまな言葉を入れられるということからこのキーワードとした。臼杵にいいものがたくさんある中で、それをしっかり市外に向けて打ち出していく、それぞれが一品というプライドを持って売り込んでいくことが、これから臼杵として必要になるのではないか。ブランド化という意味と臼杵の誇及活動という両方の意味を込めて決定した。

課題 臼杵らしい気概を持つ キーワード 一〇一品

人づくりに必要な所得

三股 それぞれの分科会で出された課題とキーワードについて議論していきたいと思います。1次産業で出た課題はずばり「所得」ですが、後藤さん補足がありますか。

後藤慎 所得というのは、リアルにこれが課題ではないのかという意見が圧倒的多数だと思っています。各分科会の課題とキーワードを見てもそれなに離れていないな、同じように考えている方が臼杵には多いんだと思っています。人づくりが課題ということはどの産業にも当てはまる。人づくりのためには臼杵に安心して暮らせるだけの安定した収入が必要。とりわけ1次産業では所得が向上すれば人づくりでの課題は解決する面が大きいと思います。

三股 所得には人づくりの面も大いにあると指摘されましたが三重野さんいかがですか。

三重野 課題やキーワードを見て、観光資源分科会と1次産業分科会が皆同じ気持ちでいるというのが分かります。自分たちは所得を得るために、臼杵を盛り上げるために「PR不足」という課題になりました。異業種や市も一体になって取り組むことで所得につながる何かができるのではと感じています。

藤居 所得というリアルな言葉ですが、後藤さんが言った人づくりを自分の会社に当てはめると、優秀な人材を育てるとか来てもらうことにしても今の給料では無理かもしれないと思います。改善するには、会社が利益を上げていくことを経営者が考えないと絵に描いた餅になります。1次産業の所得に関しては野津町はコメ農家が多く、社員の実家にも多い。その人たちに「もうがんばれ」と聞くと、元が取れるどころか補助金がなければ赤字なんですね。一度田植えを止めてしまうと元に戻せないからやっているという声があります。数年前にタバコの廃作が多く出て、空いた畑の利用法を考えたんですが、付加価値が付いて代わりになれるものは非常に難しいなと。でもそれをクリアしていかないと町が良くなっていかない、このままじゃ誰も農業をやってくれないと感じています。ただ、野津町には外部の資本が入って来ていて農業法人を立ち上げています。本当は地元の人間がそういうものを立ち上げてくれればいいなと思います。今、後藤さんとは内々に話を進めています。

誇りを持てば人が来る

三股 所得という課題の根本は、臼杵が好きだから好きな臼杵で暮らそうということなんだろうと。魅力づくりは大づくりであり、人がどんどん減れば活力がなくなるわけで、それを見据えての「所得」という課題だとあらためて感じます。藤居さんが酒の原料に地元産を使いたいと考えるのも地域づくり・人づくりであり、1次産業につながります。所得という課題が人や地域につながっていると思えました。そこからまたつながってくるのがPR不足」と「臼杵らしい気概を持つ」ではないでしょうか。人が住むには基盤である所得がないと、という話です。そのためには臼杵に誇りと自信を持って外に向かってのアピールが必要となるとます、自分の地域や産業に誇りを持ちよよ、自信を持っていいよと。それを踏まえ、誇りがあるのなら、自分たちが言っているだけじゃなく外に向かって言っていこうということだと思います。なのでこの課題コンセプトをセットにして自分の分科会に置き換えた話を伺えますか。

後藤慎 分科会で出たのは、みんな臼杵が好きだということ。何とかしたいという人ばっかりなんですよ。この二つの課題に対して思うのは、僕は農家とか百姓とか言われるのが大嫌いで、農業とはもっと誇りを持っていい産業だと思うんです。単純に物を作ってうまいしいというより、命を支えている誇らべき産業、その割には所得が低くて、農家や百姓がそこに誇りを持って やってきたのかは疑問だと思いますし、何かあったら震災とか行政のせいにする面があります。農業法人をつくって9年ぐらいしかやっていませんが、そういうのこれからのかなと思います。臼杵らしい気概を持つ、PR不足というのは結局、われわれがこの地域に住んで働いて誇らしいと思っていれば、自然に外からも人が来るということですね。いろんな産業の方と話しても、思っている方向性は一緒だと感じています。

三重野 出された二つの課題を見て、同じ気持ちを持っている人が集まったんだなと。分科会は、いいものがたくさんあるのにお客さんが少ないのはなぜかという話になりました。うまく外に向けて発信できてない部分があり、今まで皆さんと話す機会もありませんでした。今日のような機会がたくさんあれば、臼杵がまとまって大きなことができるのではないかと思います。

勝とうと思う方が勝つ

三股 キーワードにも挙がりましたが連携不足というニュアンスもあるのでしょうね。藤居さんは二つの課題に関していかがですか。

藤居 まず、私は臼杵の人間ではあるが中学から大分市に出て、大学入学からずっと県外に住み2年ちょっと前に大分に帰ってきました。その視点で臼杵を見ようと常々考えていますが、臼杵の人って「どうせ臼杵やけん、つまらんわ」とか、なんでこんなことを言うんだろうと思います。外の目で見たらいいものがいっぱいあったり、食べる物も外に持っていったら素晴らしいと評価される物がたくさんある。臼杵が好きだという気持ちがあるのなら、もっとそういう部分を持ってほしい。例えば企業活動でみたいう商品があったとして、同じ商品で同じ値段なのに営業マンB君とC君では売り上げが違う。そこで何が違うからという気概ですよね。同じ試合をするにしても勝ちにいく人と気持ちがない人なら絶対勝ちにいく方が勝つ。そういう気持ちを持って臨むことが大切だと思います。気概があればPR力も高まるのでないでしょうか。

三股 臼杵にはいい資源がたくさんあるというのは共通認識だと思います。臼杵を愛してるんだ、臼杵ラブなんだと、お三方の意見から感じました。「好きなら好きと言おうよ」ということになるんでしょうか。藤居さんから外の目でとの話が出ましたが、三つの一連の課題と外の目という ことから田中先生アドバイスいただけますか。

田中 所得というのは私の専門の美術史とは一番縁遠いというか、切実に考えが及ばない部分があります。だからこそ一番大事なところではあります。後藤さんが言っていた人づくりでは、大学はもちろん人づくりをするところです。その熱さを一人一人が持つのが前提になりますが、数が多ければ多いほどいいんだろうなと思います。多くなれば外から見えなかった熱さや熱い思いが見えてくる、そういう方向に向かっていけないかな、その時に大学をうまく使っていただきたい、という思いです。個人的な体験で言うと、臼杵には1Rで来ましたが駅に降りた時、言葉は悪いですが寒々しさというか、人の熱気がなかりませんでした。町も住んでいる人の表情が明るみや雰囲気に表れると思うので、熱さを持った人を増やしていくことが必要なのかなと思います。

他業種ともっと連携を

三股 課題の認識は皆さんでさせたのではないかと思います。これからはキーワードを掘り下げていきたい、同じように話をしながら、課題の解消方法もしくは目指すべき方向を出して臼杵の未来を描きたいと思います。キーワードについて一言ずつ いただいて話をしていきましょう。1次産業の「守りつなぐ」は地域の人づくり、地域づくりとつながって、国土の荒廃をストップして人をつくるというイメージだと思いますが補足があればお願いします。

後藤慎 1次産業に携わるといろいろありまして。例えば、僕は特定農業法人の代表として来ているんですが、よくTPPどうですか、とか自給率はどうですかと聞かれるんです。僕はそんなことはどうでもいいとは思わないんですが、それより守られるべき水田が活用されていない現状がある。僕からなぜ今の仕事をしているかという、水田農業は日本の文化の根幹だと思っていて、これを守りたいと。分科会メンバーで水産業の広戸一宏さんは海を守る、矢田しのぶさんは食育などで子どもたちの将来を守ろうとしている。1次産業は守るべきものをちゃんと守ること、後世につなげていくことを必要とします。今6次産業化が注目されていますが、僕はそれより地域の他産業とのつながりが大切だと思います。「守りつなぐ」のつなぐは、後世へのつなぐという意味と他産業の方とお互いつながっていこうということと捉えます。

観光資源／若手リーダー
Yoshiki Mieno
三重野芳樹 さん
臼杵市、36歳。小心臆病事み又の代表。講師歴、ふくの郷臼杵メンバー。農内冬中に美味で修行を積んだ。臼杵の活気や交通量の減少が心配。

三股 つなぐというキーワードに連携が入ってくるという理解でいいですか。そうすると観光資源分科会のキーワードと絡んできます。観光も守るという意味があると思いますので、それを含め補足してください。

三重野 分科会で出たのは、お客さんをどうお呼び込むか考えた時、臼杵にも観光以外のいろんな業種があるが連携があまりないなということ。もっと他業種の方と連携を取って意見を聞けば、外に向けてのアピールにもつながり、臼杵の町が良くなるのではと思います。

技術生かし金に換える

三股 1次産業で守りたいところで、歴史を守ることは臼杵観光では大切ではないかなと思うんですが。観光資源分科会の他の人にも聞いてみたいと思います。

安野祐二 臼杵の資源はまず歴史。国宝があり、古い町並みがあり、大友宗麟が築城した臼杵城、臼杵狐鳴まつりなどもあります。次に自然環境。リアス式海岸や自馬渓があります。次に食。フグやタチウオ、黄飯やきらすまめしがあります。歴史観光だけが目的でフグを知らないお客さんもいるので、歴史、自然環境、食を自分たち「人」がつなげていきたい。これがつながれば滞在時間の延長につながるのではと思います。石仏の入館者が10万人ほど少なくなっているということなので、長く臼杵に滞在してもらうために横のつながりが大切だと思います。

1次産業／若手リーダー
Shintaro Goto
後藤慎太郎 さん
大分市、38歳。大学卒業後に県内の農協で働き、大分大学大学院やイタリア留学などを経て2004年に西臼杵農業社、09年にコヂャイコ社を設立。

古谷美和 PR不足ということは外から来るお客さんに向けてではなく、守りつなぐ上で地元の人が共有して臼杵のことを知るということです。合併して旧臼杵市の人が野津のことを知らないとか、その逆もあるので、野津のうまいものと臼杵のうまいものをつなげていったらもっとすごいものができるのではと考え、守りつないでの連携をしたいと思います。

三股 つなぐというところのキーワードは人となるのではと感じました。歴史、自然、食も人が媒介して、歴史を求めてきた人に食を紹介するなどすれば面白くなっていく。それが連携になるのかなと、藤居さんのところとタッグを組んで商品化をしましょうとなって、それがつなぐ。つなることによって守りという目的を達せられるということになるんですね。もう一つ、地域産業分科会で「一〇一品（いちまるいっぴん）」というキーワードが出ました。先ほど臼杵に誇りを持つという話がありましたが、〇の中は何でもよくて、地産地消では内向きだから誇りを持って売り出そうということだと思います。この言葉を自分たちの分科会で考えるとどうなでしょうか。

後藤慎 結局守りつなぐということをやっていったら、おのずと何かできがらんんじゃないかと思います。旬食フェスタやマルシェ、オーガニックシネマなどでいろんな業種の人をつなとと外から人が来ると思っています。キーワードはどの分科会から出たのを見ても、自然に答えがつながっていくのではと思いました。

ワンカップひれ酒開発

三股 確かに一連のキーワードはつながっていると感じます。思いのところは一緒なんだろうなと。一〇を観光資源に当てはめると何をどのように売り出してみましょうか。

地域産業／若手リーダー
藤居徹 さん
臼杵市野津町、38歳。藤居酒造代表取締役社長。大学卒業後、宝酒造勤務を経て2001年入社。12年より現職。大分県のうまい物に注目。

三重野 臼杵に来て何かお土産を買って帰ろうとしたら臼杵煎餅しかない状態です。自分は知名度が上がってきたフグを扱っているので、フグを使った手軽な土産ができるのではなど考えています。臼杵を盛り上げるために農業や水産業の方などいろんなコラボをしたり、酒造会社とワンカップひれ酒のようなものも造れないかと。自分が考えている中には〇に当てはまるものが国からのではと強く思っています。

三股 つないでいくと一〇一品になるのかもしれませんね。会議の前に話をしていた中で美焼酎を臼杵の麦茶で割って飲むとおいしいと聞きました。地元同士でタッグを組んでおいしくなるということです。藤居さん補足がありますか。

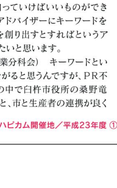
藤居 分科会でこのキーワードを取り上げたんですが、やはり地産地消という言葉に違和感があると。大分県は元々「一村一品」を旗印に産業を育ててきました。大分麦焼酎もその中で広がりました。千葉県のように大酒貯地の近くなら地産地消の効果が高いと思いますが、大分で掲げる旗印としては一企業一品とか、一社一品などの方が旧指す方向に合うんじゃないかと考え、キーワードとして挙げさせてもらいました。先ほどのひれ酒を一緒に造るとか、一社でなく同じ共同体とか同じ仲間で一つの物を創って売っていく旗印は地産地消ではないんですね。掲げる旗印って大事じゃないですか。子どもの頃から一村一品という言葉に深くなじんでいて、そういう意味の旗印として一〇一品がいいと思います。

博物館造り知の拠点に

三股 確かに一〇一品の方がもうかりそうな気がしますね。ここの旗印の下に集えばもうかるよ、いいことがあるよと。非常になじみのある言葉でピンとくると思います。ゆくゆくは大づくり、地域づくりにつなげていくことになると。それぞれの分科会が違うので、出された課題やキーワードをどうやってまとめようと思っていたのですが、地域を熱く考えている人の思いはやはりつながっていくのだなと感じています。守りつなげるには人の連携によって旗印の下でブランドを築いていく。一連のキーワードが流れているような気がします。田中先生の目から見てどうでしょうか。

総合コーディネーター
Hideaki Minato
三股秀明
1990年大分合同新聞入社。整理部、社会部、佐伯支社を経て整理部長兼校閲部長。44歳。資源豊富な臼杵、売り出さなきゃ、もったいない！

田中 今回の自分なりのキーワードをあげるとすると「文化」というものが出てきます。例えばタチウオを捕るのも文化でそれをさばくのも文化。石仏も酒造も文化で、それぞれの分科会で文化というものが話し合われたのが面白かったです。例えば臼杵石仏を守るのにも修復が必要だとか、現状維持にしても何かしら手を加えていかないと現状維持はできない。逆に言うと変わっていくことに他ならない。だから守ることは変わることとイコールで結ばれるのかなと思いました。文化は歴史を持っていることであって、その歴史をしっかり捉えて認識して広めていくことが臼杵にとって重要と思います。歴史をひも解いていけばきっとまたいろんなつながりが見えてくるだろうなと。気概をというキーワードですが、気概さが単に軽くなるだけでなく本質的な楽しみとしてあるためには、一方で厚みのある何かしらが大切で、その一つは歴史を学び文化の層をしっかり捉えていくことなんだと思います。アドバイスとして、臼杵に何が足りないか考えると大学と博物館ではないか。大学を誘致するのは難しいが博物館だったら何とかなるかなと、そうした知の拠点になるものが町の中にできないかと思います。博物館ができれば学芸員が集まり人づくりやつながりの拠点になっていけるのではと考えます。



総括アドバイザー
Shuji Tanaka
田中修二 さん
京都市出身、44歳。大分大学教育協材科学部准教授、成城大学大学院文学研究科美学・美術史専攻、博士。美術における「中央」と「地方」の関係が気になる。

客引き付けるもてなし

三股 臼杵は元々コンテンツがいいので一〇一品という理念に向っていけばいいものができるのだと思います。アドバイザーにキーワードを基に具体的な何かを創り出すとすればというアドバイスをいただきたいと思います。

土井嗣一（1次産業分科会） キーワードというか課題の方につながると思うんですが、PR不足の点では分科会の中で臼杵市役所の桑野竜永さんのお話を聞くと、市と生産者の連携が良くとれているようです。ブランドづくりなどで行政の役割は大きい。言葉は悪いですが、使えるところは使って行政のパワーをもらいながら進めていけば、今取り組んでいる有機農業や甘太くんなどもますます広がり、それが所得向上につながり、後継者不足の解消につながればいいのかなと思います。

三浦基路（観光資源分科会） JR九州の三浦です。普段福岡に住んでいますので、ハピカムという取り組みは知りませんでしたが、今回お話をいただいてありがとうございます。大分県大分市出身者として非常にうれしく思います。逆に言うとこういう会を催す意義が必要になったらどう出て来たんだろうなと感じています。福岡に住んでいる時に三重県とか佐賀県を聞いたら、二つはすぐ石仏しかないという印象だった。それだけ臼杵には武器がなかったんじゃないかと。でもすごく強い武器があったので、二つに分られて、言い過ぎかも知れませんが何もしなくてもよかったんじゃないかと。ただ、人も減りました。交通人口もどんどん減っていくので、守っていくだけだと気が付いたら置かれていっていた。置いていかれつつあるので気が付いた、というのが実際ではないでしょうか。サッカーでもそうなんですが、うまい選手が一人二人いても勝たないですよね。昨年のサガン鳥栖が強かったのは決して有名選手がいたからではない、連係やチームワークが勝負の分かれ目だと思います。規模の大きい1クラブがある中で生き残っていくのはそこなんです。臼杵はどうかというと、今回いい機会ができたので、ぜひみんなで何かやってみてはどうかなと思います。田中先生のように私も久しぶりに臼杵駅で降りてわくわく感を感じませんでした。私はマラソンが好きで鹿児島の指宿や宮崎の田舎の飫肥（おびい）に走りにいくのですが、今は家族が行きたがるようになっています。走りもしないで家族が行きたがるのは、つながった人たちの温かいおもてなしの心が駅を降りた瞬間に感じられるからです。その温かさやおもてなしの心が臼杵を持ち上げていくことになると思います。きっかけはマラソンでもバーベキューでも、今あるイベントをつなげるだけでもいい。あそこに行くと温かい人がいると。つまらないことのようだが回を重ねれば、そんな人の温かさが家族を引き付けてお客さんを引き付けます。いいものを持っているからこそ、ぜひつながりの場を継続して温かみがあるお迎えとして迎えてほしいです。

後藤智史（地域産業分科会） 大分ベンチャーキャピタルの後藤です。ハピカム国東編にも参加しましたので、国東との違いから話させていただきます。国東は元々農業が中心で、昭和に入ってからで空港ができた。キヤノンなどの進出で工業化が進みましたが、臼杵と比べて資源があります。世代に関係なく集まって、何かを生み出そうともがかれている。臼杵はどうなのかというと、町並みや自然やフグなど資源はたくさんある。三つの分科会とも課題は共有されていて、やるべきことは決まっていると感じました。つなぐ、連携というキーワードが出てきましたので、それぞれがやるというより「一臼百品」のように臼杵が一つになって百のものを創っては思います。また、大分市の一消費者の意見ですが、気概さというのはすごくはしいなと。外の人間は臼杵一フグと思思しますが、来週フグ食いに行くかとはなかなかならない。入り口を気軽にしてほしい。それを皆さんの知恵でつくりあげていけばいいのかなと思います。せっかく若い世代が集まる機会ができたので、この世代で継続的に集まって何か生み出していけばいいとそれます。

寮造り大分大生呼ぼう

三股 皆さん認識は共有していたと思います。豊富な資源があるので、産業・歴史・伝統を守るために人づくりと自分の地域、商品の見つめ直して自信と誇りを持ち、積極的にPRしていこうというようこなんだと思います。ぜひ紹介させていただきたいアイデアがあります。田中先生との事前の話の中で、臼杵は大分大学に近いから通学補助などを検討して、学生を臼杵に住まわせたら町も活気づくのでは、とおっしゃっていました。先生に紹介していただけますか。

田中 雑談の中で出たものですが、町を歩いていて人がもっといればなと思うことが多い。餅ってうちの大学は無駄に人が多い。学生はだいたい大学の裏側の下宿に住むんですが、そこで何か活動しているかというと特になくて、寝るために帰るだけになっています。県内はどこも「人が少ない」と言われている中で、アンバランスな印象を受けます。大学には学生寮があって、非常に安い家賃だが、部屋数が少ないので2年生まで退寮しないといけない。だとすれば、臼杵市が交通費を補助とか家賃の補助とかで学生に住んでもらって、そういう学生を町づくりに引き込んで行けば何か面白い未来像やんづくりの ありか出てくるのではと考えました。

三股 面白いアイデアだと思いませんか。時間になったのでそろそろ締めさせていただきたいと思います。この会議が皆さんが議論するきっかけにはなり得たのではないでしょうか。今日だけに終わらず、今後も連携してつながっていって面になればいいなと思います。そのお手伝いは新聞社もさせていただきたい。これを聞いとない臼杵を外にPRする時はわれわれも使ってください。臼杵の未来のために一緒に頑張っていきましょう。

これまでのハピカム開催地／平成23年度 ①宇佐市（10月） ②津久見市（3月） 平成24年度 ③九重町（6月） ④日出町（9月） ⑤国東市（12月） ⑥臼杵市（3月）

温かい町が生む「一臼百品」

大分を学ぶ

臼杵編

臼杵市土づくりセンター 給食畑の野菜有機農業実証圃

有機農業の大切さと課題考える

私たちも大分大学経済学部の6人は、4月からフィールドワークを通じて過疎地の農村の問題解決や地域活性化を研究する予定です。そこで有機の里づくりを推進する土づくりセンターと農家を訪れて、先進的取り組みとしての収穫を挙げているのかを学び、今後の研究活動に生かしたいと考えました。

土づくりセンターで説明をしてくれたのは、市有機農業推進室の佐藤一彦室長。センターで造った堆肥は草木やモミ殻伐材などと豚ふんを4対1の比率で混ぜたものの。佐藤さんは「農産物がおいしく育つためにはその基となる土の力が大切で、そのためには土を自然な状態に返すことが大切。生ごみは自然なものではないから使いません」と説明。堆肥といえば生ごみ容器のコンポストしか思い浮かばなかったので新鮮な驚きでした。市は土づくりから始めて、ほんまもん農産物という独自の有機農産品認証制度を設けているそうです。「旬の物を食べると健康になる。何でも野菜を食べていればいいということではないとの佐藤さんのお話は強く印象に残りました。

この堆肥を使って有機農業をしている藤嶋裕美さんにもお話を伺いました。藤嶋さんは私は有機じゃないからと、なかなか言ってくれない。だからどうしたらいいかと。でも、昔はメダカなど生き物がいっぱいいた。そんな田舎を取り戻したい」と思いを語ってくれました。畑ではグリーンボールの苗植えを体験。藤嶋さんが育てたホウレンソウを食べさせてもらいました。生のホウレンソウは初めてでしたがおいしかったです。

土づくりセンターも市の予算を投入していて、堆肥の売り上げだけでは賄えないそうです。農業をする人だけでなく消費者に有機の良さを広めていくことが、同時に有機産品のブランド化を進め、取り組む生産者を増やしていくことが大切だと考えました。研究を通してそのお手伝いができればと思います。

［参加者］
2年
中嶋洋太
青木理沙
江戸祐貴
ふ
浜野康成
渡辺裕
馬場朝

国立大学法人 大分大学
OITA UNIVERSITY
□臼野原キャンパス 〒870-1192 大分市大字臼野原700番地
□挾間キャンパス 〒879-5593 由布市挾間町医大ヶ丘17丁目1番地
□庄子キャンパス 〒870-0819 大分市庄子新町1番1号